調査結果

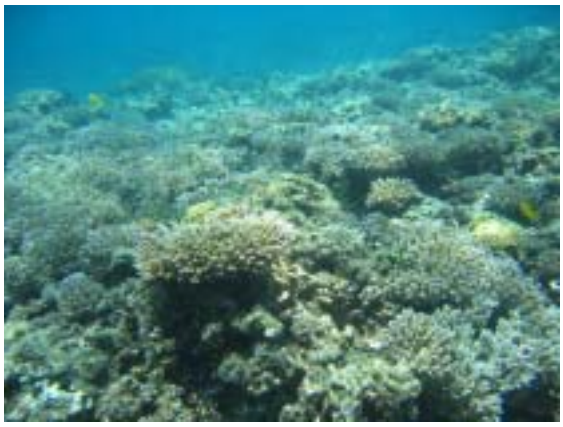
(1)沖縄島

①サンゴ被度

沖縄島周辺海域の 80 地点中 78 地点では、サンゴの被度が 10%を下回りサンゴの生息状況は極めて不良であった。残存しているサンゴ群集は、高水温やオニヒトデの影響に強いと考えられるハマサンゴ属や、10cm 未満のミドリイシ属やハナヤサイサンゴ属の小型サンゴ群体であった。

平成 14 年度におけるサンゴ被度が 25～49%であった地点は国頭村奥沖（St.38）、名護市天仁屋沖（St.46）および那覇空港沖（St.76）の 3 地点であったが、平成 15 年度には那覇空港沖（St.76）の 1 地点、平成 16 年度は 25%を上回る地点は見られなくなった。

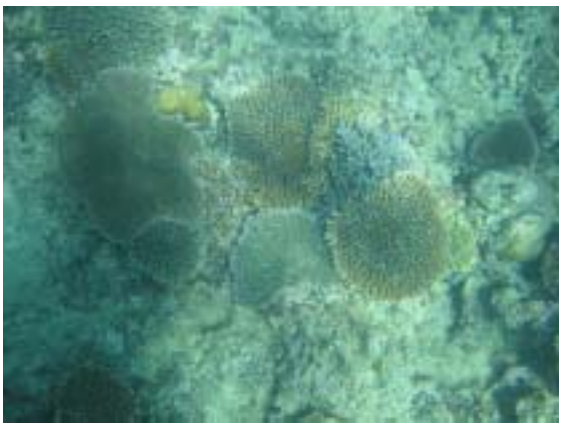
一方、沖縄島西海岸の 2 地点、St.3 と St.4 のサンゴの被度は 20%であり他の調査地点に比べ良好であった。50m×50m の被度は 20%であったが、10m×10m程度の狭い面積でみると被度が 50%である場所もあり、1998 年の白化後健全なサンゴ群集が回復してきたと考えられた。優占種は、St.3 では枝状ミドリイシ属であり、St.4 では直径 30cm 程度の卓上ミドリイシ属であった。



海底状況（St.3）

海底状況（St.3）

海底状況（St.4）



海底状況（St.4）

②オニヒトデ個体数

平成 14 年度には 10 個体を上回る地点は無かったものの、4～9 個体観察された地点は 7 地点あり、特に東海岸の名護市から宜野座村の 3 地点はすべて 4～9 個体観察された。

平成 15 年度では、国頭村楚州沖（St.39）、慶佐次沖（St.45）で 10 個体以上観察され、特に慶佐次沖（St.45）は 27 個体と大量発生状態であった。その他 4～9 個体観察された地点は 5 地点あった。

平成 16 年度は、嘉手納町から豊見城村までの 3 地点、および津堅島南で 4～9 個体観察された。その他の地点はすべて 0～3 個体の最も低い区分であった。

(2)慶良間諸島

慶良間諸島では、最重要保全区域を中心に良好なサンゴ群集が生息していた。平成 16 年度に調査した 73 地点中、50%以上の高い被度でサンゴが生息していたのは、渡嘉敷島西海岸（St.12、13、14）、安室島南（Z-a）、阿嘉島ニシハマ（Z-c）、奥武島南（St.44）の 6 地点であった。特に、渡嘉敷島阿波蓮沖（St.14）、阿嘉島ニシハマ（Z-c）では 75～100%の非常に高い被度でサンゴが生息していた。調査した過去 2 年間でサンゴ被度が大きく減少した地点は儀志布島西（St.1）、嘉比島 2 地点（St.29 と St.30）、屋嘉比島東（St.46）であった。

黒島、前島及びチービシでは調査を行った平成 14 年度からサンゴの被度は低く、今年度 24%以上のサンゴ被度は黒島の 2 地点のみであった。

慶良間諸島では、沖縄島周辺で分布の少ないアオサンゴ、トゲサンゴおよびショウガサンゴが広く分布しており、今後の沖縄島周辺への供給源として貴重なサンゴ群集が保持されていた。

海底状況（St.12）

海底状況（Z-a）

オニヒトデ個体数

平成 16 年度の調査では、オニヒトデは前島東海岸で多く見られ 2 地点（St.56 と St.58）で 20 個体以上の大量発生状況であった。前島周辺では過去 2 年間継続して大量のオニヒトデが確認されている。渡嘉敷島と座間味島周辺海域では、今年度座間味島北東岸（St.17）で多く 10～19 個体見られた。その他渡嘉敷島西海岸 2 地点（St.13 と St.15）、安室島東（St.23）、嘉比島東（St.29）の 6 地点でも 4～9 個体のオニヒトデが確認された。